イスラームにおける
信仰の基本

著者：ルティフィ・シェントルク

目　次

前書き

　イスラームの普遍的な規則の一つが、その信仰にまつわる基本である。

　最初の人間、そして最初の預言者であったアーデム（アダム）以来、すべての預言者は、何より信仰の基本を伝えてきた。なぜなら人間にとって第一の義務は、アッラーを知り信仰することにあるからである。人はまず信仰し、その後、信仰が求めている事柄を実践していくのである。

　私たちはこの本で、イスラームの信仰の基本についてまとめてみた。それは序論及び三つの章からなっている。

　最後に、この本が皆様方にとって有意義な本となることを、心より願い、また内容に過ちがあれば、それを赦してくれるようアッラーにお祈りする。

１９９８年1月

トルコ共和国宗務庁宗務高等審議会委員

ルティフィ・シェントルク

序　論

宗教とは

宗教とは、言語学的に、ならわし・法則・処置・崇拝といった様々な意味を含んでいる言葉である。またイスラーム学者は、宗教を次のように定義している。「**宗教とは、理性を持つ人びとを、自らの自由な意思によって、最良、最善、最高の状態へと至らせる神聖な規範である**」

この一文から、次のようなことを読みとることができる。

1、この教えを創られたのはアッラーであられる。人間に宗教を創造する権限はない。

2、宗教は理性ある者を対象としている。そうでない場合は宗教的義務を課すことはできない。

3、宗教にまつわる様々な規範は、アッラーが預言者たちに神意によってもたらされる。預言者たちはその規範、つまりアッラーのご命令と禁止事項を人びとに伝える。

4、宗教の目的は、現世と来世において、人びとを幸せにすることにある。宗教は、人間がなぜ創造されたのか、人間はどのような義務を負っているのかを解き明かしている。

5、人間が最高、最善の状態に達するためには、他からの強制ではなく、自らの自由な意思で宗教の教えを認める必要がある。なぜなら宗教に強制があってはならないから。聖クルアーンには明確に、「**宗教に強制があってはならない**」と述べられている。[1]

1　第2章　雌牛章256節

宗教の重要性

人間は、そして社会はどのような時代、どのような地域にあっても宗教を必要としてきた。なぜならば、どの宗教も人間が幸せになる道を説いてきたからである。宗教がその教えで説いていること、奨励していることは、人間が人間らしく生き、家族や社会、民族、さらにはすべての人びとに対して有益な存在となるためのものである。

宗教は、社会を向上させ、発展させる基盤を含む、一つの規範である。

宗教は、同時に、道徳的に、人間に正しい方向を指し示す規範である。

宗教的な情操の衰退は、道徳や法令に反する犯罪が増える原因となる。

要するに、どの観点からみても宗教は、人間にとって欠かせないものなのである。信仰心の欠如は悲しむべきことである。信仰心を失った人びとは、この物質主義の蔓延する世界が生み出す様々な弊害や脅威にさらされ、いつも不安定な精神状態におかれている。彼らは永遠の命や来世における生を信じないがゆえに、ひたすらこの世の享楽を追い求め、それを手にするためになりふりかまわない状態に陥っている。そして、いつの日か、この世の快楽とも決別し、すべてが無に帰してしまうことを考えるにつれ、不安は高まり、心の安らぎを得られなくなるのである。

これは人間にとって何よりも大きな災いである。しかし宗教は、死の先に、より幸せな永遠の生があることを吉報としてもたらしている。そして、宗教はそこに至る道筋を示し、人間に安寧と安心感を与えているのである。

宗教の分類

先にも述べたように、宗教を創造されたのはアッラーである。それゆえ、アッラーから預言者に啓示され、預言者から人びとに伝えられた教えは、啓示されたままの形を保っているとき**「真実の宗教」**となる。

アッラーによって啓示されたにもかかわらず、本来の形を保つことのできなかった教えは**「変質させられた宗教」**と言われる。現在のキリスト教及びユダヤ教はその例である。これらはアッラーによって啓示されたものの、時の経過とともに、そのあり方が変えられてしまった教えである。

今日、この世界で真実の宗教と言ってよいものはイスラームだけである。それはアッラーによって、最後の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に啓示され、原形を保ったまま私たちに伝えられ、本来の姿を変えることなくきている教えなのである。

イスラームは、最初の人間であり最初の預言者であるアーデム（彼の上に平安あれ）が伝えた**「タウヒード（神の唯一性）を説く教え」**と、その他の啓示による教えの継承であり、これらのうち最後に下され、最も完成されたものである。聖クルアーンで言及されている信仰の基本は、最初の預言者が伝えた信仰の基本と同じものである。聖クルアーン以前に下された聖典でも、（原理が変更される前は）これらの信仰の基本が記されていたのである。

イスラームの教えの特徴

イスラームの教えの主な特徴は以下の通りである。

イスラームは最後の教えであること

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が最後の預言者であり、彼がもたらしたイスラームはアッラーによって啓示された最後の宗教である。アーデム（彼の上に平安あれ）を初めとし、アッラーの唯一性を説く**「タウヒードの教え」**は､発展を重ね、イスラームにおいて完成した。もはや、その後、新しい教えが啓示されることはないのである。

どのような場合でも、最後のものは、それ以前のものと比べると不足や欠点がないものである。イスラームもそれと同様で、それ以前に下された教えと比べて完成されたものとなっている。

だからアッラーは、最後の教えであるイスラームの規範について人びとに責任を負わせ、人びとがこれを受け入れることによって神は悦ばれるのだということを伝えたのである。事実、聖クルアーンには次のように述べられている。

「本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム（主の意志に服従、帰依すること）である」[2]

「イスラーム以外の教えを追求する者は、決して受け入れられない。また来世においては、これらの者は失敗者の類である」[3]

「今日われはあなた方のために、あなた方の宗教を完成し、またあなた方に対するわれの恩恵を全うし、あなた方のための教えとしてイスラームを選んだのである」[4]

普遍的な教えイスラーム

イスラームは、最後の教えであると同時に、すべての人びとのための宗教で

2　第3章　イムラーン家章19節
3　第3章　イムラーン家章85節
4　第5章　食卓章３節

もある。なぜなら預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、一部族、一民族のためではなく、全人類のために遣わされた預言者だからである。

事実、聖クルアーンには次のように記されている。

「言ってやるがいい。「人びとよ、わたしはアッラーの使徒として、あなた方凡てに遣わされた者である」」[5]

「われは、全人類への吉報の伝達者または警告者として、あなたを遣わした。だが、多くの人びとは、それが分からない」[6]

イスラームの規範は最後の審判の日まで有効である。イスラームは最後の教えであるため、その後、その規範を廃止または改正するような新たな教えはもたらされていない。

イスラームの教えの基本

イスラームには、変わることのない基本がある。それは信仰（イーマーン）、行い（アマル）、及び道徳（アフラーグ）の三つに分けることができる。

a) 信仰に関するもの

信仰とは、何かを心から信じること、結びつけられること、という意味である。心における信じる気持ちを「アキーダ（信仰）」という。その複数形が「アカーイド」となる。

b) 行いに関するもの

行いに関するイスラームの基本は命令と禁止事項である。私たちは、命じられていることを行うこと、また禁止されている

5　第7章　高壁章158節
6　第34章　サバア章28節

ことは行わないこと、などに対して責任を負っている。それらの中で、アッラーとそのしもべたちの間の関係に関わるものが崇拝行為（信仰儀礼）である。行いに関わる基本の一部は、人と人との関わりを整える規範である。その基盤になるものが正義である。

c) 道徳に関するもの

道徳的規範は、美徳を身に修めること、精神があらゆる悪意や悪い感情から浄化されること、精神の向上を意図する諸規範である。

宗教的規範の根拠

ここでまとめた宗教的規範がよりどころとする根拠は啓典、スンナ（預言者の言葉や行い）、イジュマーウ（法学者たちの見解の一致）、キヤース（比較による類推）の四つである。全ての規範はこの四つを根源としている。

啓典

啓典とは、聖クルアーンのことである。

聖クルアーンは、アッラーから、ジブリール（大天使ガブリエル、彼の上に平安あれ）を通じて、アラビア語でもって預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に下され、確かな経路で私たちに伝えられ、書物として記された言葉である。

聖クルアーンはイスラームの基本となる第一の根源である。

聖クルアーンは、教えの全ての要素を包括するものである。そこには他の啓典の要素もふくまれている。

スンナ

スンナは、聖クルアーンをのぞく、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の言葉や行動という意味である。スンナは、言葉、行動、タクリールの三つからなる。

言葉によるスンナ。　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の全ての発言である。「全ての善行はサダカである」[7]というハディースがその例である。

行動によるスンナ。　預言者ムハンマドのなされたこと、振る舞いということである。「預言者は、礼拝のためにタクビール（アッラーフ・アクバルと唱えること）をされるとき、その手を耳の位置まで上げられた」[8]というハディースがその例である。

タクリールによるスンナ。　他の者がその行為をしているのを預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が見たとき、あるいは他の者がそれを語るのを聞いたとき、注意などされず、適法とみなされたことを意味する。

その一例は、アナス・ビン・マーリクの次の伝承である。「我々は太陽が沈んでから、夜の礼拝の前に２ラカアのナーフィラの礼拝（任意の礼拝）をした。預言者ムハンマドは我々を見ておられたが何も命じられず、何も禁じられなかった」[9]

スンナは、イスラームの規範の二番目の根源である。

スンナには二つの重要な役割がある。一つは聖クルアーンを解き明かすこと、もう一つは、聖クルアーンでは言及されていない規範を定めることである。

スンナが、イスラームの規範の二番目の根源であることにつ

7　ブハーリー、アダブ、33、ムスリム、喜捨、16
8　ムスリム、礼拝、9
9　ムスリム、礼拝、6

いてはイジュマーウが成立している。四大正当カリフの時代から今日に至るまで、この見方に対する異なった解釈は出されていない。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）にじかに会えるという幸運を手にしていた教友たちから、私たちのこの時代に至るまで、全てのイスラーム学者たちがスンナに対して敬意を示してきたのである。なぜなら、スンナに従うことは聖クルアーンの命令でもあるからである。聖クルアーンにおいて次のように語られている。

「使徒に従う者は、まさにアッラーに従う者である」[10]

「使徒があなた方に与えるものはこれを受け、あなた方に禁じるものは避けなさい。」[11]

スンナを無視した状態で聖クルアーンを完全に理解することは不可能である。
なぜなら教えの規範の全てがクルアーンでは触れられていないし、多くの規範の詳細、実践方法などはクルアーンでは述べられていないからである。

例えば、礼拝が義務であることを聖クルアーンは教えている。しかし、礼拝とはどのようにすればいいのか、何回すればいいのかという記述はクルアーンにはない。その詳細については、スンナから、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が行った方法から知ることができるのである。

イジュマーウ（見解の一致）

イジュマーウとは、多数の人をもって「ある事を決意する」、「ある点で意見が一致する」という意味である。

10　第4章　婦人章80節
11　第59章　集合章7節

宗教用語としての意味は、預言者亡き後、一定以上の学位を有する導師たちの意見が、ある事柄に関してその宗教的な規範が適切であるという点で一致することである。

キヤース（類推）

キヤースとは、啓典やスンナや見解の一致において結論が出されていない問題について、これらの論拠のうちどれかで言及されている規範をもとに結論を下すことである。

非常に簡単にまとめたが、以上が教えに関わる規範と、それらの論拠である。

この本では、信仰に関わる規範について言及していく。

第一章　信　仰

イスラームの教えの基本原則の一つが「信仰」である。すべての預言者たちは、最初に信仰についての基本を伝えている。なぜなら、アッラーの御許で、信仰を伴うことなく行われる崇拝行為には、何の価値もないからである。人はまず信仰し、それからその信仰が求めるものとして、宗教儀礼の義務を果たすべきである。そのためにも、信仰について、そして信仰の条件について理解することが必要となる。

信仰には、一般的な意味と、固有の意味とがある。

信仰の一般的な意味、つまり辞書で見られる意味とは、信じること、認めることである。「信仰」という言葉がこの意味で使われたクルアーンの章句がある。その一つは、ユースフ章の17節だ。ユースフ（彼の上に平安あれ）の兄たちは、父であるヤークーブの許に来て言った。

「父よ、私たちは互いに競争して行き、ユースフを私たちの品物のかたわらに残しておいたところ、狼が（来て）彼を食べてしまいました。私たちは真実を報告しても、あなたは私たちを信じては下さらないでしょう」[12]　この節で用いられている「信じる」という言葉は、一般的な信じるという意味である。

イスラームの用語としての「信仰」の意味は、「預言者がアッラーからもたらされた明確に知られているすべてのことを正しいと信じ、承認することである」

12　第12章　ユースフ章17節

「使徒は、主から下されたものを信じる。信者たちもまた同じである」。[13] この章句における「信じる」の意味はこちらである。「信仰」というと一般的にこの意味で受け止められるべきである。

この信仰というものは何によって実現されるのだろうか。疑いもなく、信仰は心で行われるものだ。言葉は心にある信仰を表現する。

預言者がアッラーからもたらされた事柄を心から信じ、それを告白する人が、イスラームの信者である。心から信じたとしてもそれを告白せず、言葉で表現しない人は、例えアッラーによって信者として認められたとしても、その信仰が人に知られることがない以上、その人にはイスラーム法は適用されない。さらに信仰を告白しなかったということで罪にもなる。だからこそ、書物などで信仰について解説する際、「心と言葉で承認すること」と表現されているのである。ただし、心から信仰しながらも何らかの事情でそれを表現しない人も、アッラーの御許では信者である。

信仰と宗教的実践

宗教的実践と信仰の間には密接なつながりがある。宗教的実践や崇拝行為が信仰の指針であることは疑いもないことだ。ただ「信じました」というだけでは十分ではない。心にある信仰の灯火が消えないために、宗教儀礼が必要なのだ。アッラーが命じられたことに従い、禁じられたことを避けることが、成熟した信仰のためには必要なのである。成熟した信者とは、心と

13　第2章　雌牛章285節

言葉で認め、体によって宗教的実践を行う人のことをいう。こういった人を成熟した信者と言うことに異議を唱える者はいない。基本的に、信者はこのようにあるべきであり、信仰の要求するところである宗教的実践や宗教儀礼を行わなければならないのである。

ただ、心と言葉で認めつつも、その信仰の要求するところである宗教的実践を行わなければ、つまり礼拝もせず、斎戒もせず、喜捨も払わず、アッラーが禁じたことを避けないのであれば、その場合はどうなるのだろうか。教えを放棄して、イスラームから抜け出したことになるのだろうか。

信仰しているにも関わらず、アッラーの命令にしたがわず、また禁じられたものを避けようとしない人も信者ではある。ただし、罪を負った信者である。なぜなら宗教的実践の欠如、宗教儀礼の欠如は信仰の本質に否定的な影響を与えるわけではない。信仰と宗教的実践や儀礼は同じものではなく、別々のものだ。別の言い方をするなら、宗教的実践は信仰の一部ではなく、だから実践の欠如は信仰の欠如ではないのである。

それは水素と酸素に例えることができる。そのうちのどちらかがなければ水はできない。信仰の礎石は心における承認だ。それがないと信仰はありえないのである。人の体には、手、足、目、耳といったいくつかの器官がある。これらのうちの一つがなくても体は存在する。ただし完全なものではない。宗教的実践や宗教儀礼もこのようなものだ。これらの欠如は信仰の欠如ではないが、そうした人は成熟した信者ではないのである。

宗教的実践とは、信仰の基盤の一部ではなく、信仰を成熟させるものである。そもそも、求められているのは、完成した信仰をもつことである。

クルアーンのいくつかの章句やハディースでは、宗教的実践が信仰の一部であるかのように示されている。

「だが信者を故意に殺害した者は、その応報は地獄で、かれは永遠にその中に棲む
であろう」[14]

「不義を働く者は、信者としてそれを行っているのではない。盗みを働く者は、信者としてそれを行っているのではない。酒を飲む者は、信者としてそれ行っているのではない」[15]

このためハワーリジ派とムーテジレ派は、このクルアーンの章句やハディースを論拠として示し、宗教的実践を信仰の一部と見なして、信仰心があっても必要な行動を実践していない、例えば礼拝をしない者、大きな罪を犯す者は信者ではない、と主張してきた。この点についてはどう考えるべきであろうか。

宗教的実践が信仰の要であると述べているクルアーンの章句やハディースは、これらの他にもある。しかし、罪を犯した者も信者であるということができ、否定がないかぎり、信仰は亡くなってはいないということを示しているクルアーンの章句やハディースも多数あるのだ。次の二つがその例である。

「あなた方信仰する者よ、謙虚に悔悟してアッラーに帰れ。おそらく主は、あなた方の様々な悪を払い、川が下を流れる楽園に入らせるであろう」[16]

この節でアッラーは、罪を犯した者たちに「信仰する者よ」と呼びかけておられるのだ。もし、罪を犯した者の信仰が失われるのであれば、アッラーはこの人びとに「信仰する者よ」と呼びかけられることはなかったであろう。

14　第4章　婦人章93節
15　ブハーリー、エシュリバ、1
16　第66章　禁止章8節

アブー・ザッルは次のように伝えている。

預言者のおそばに伺った。預言者は白い着物を着て寝ておられた。私は戻った。それから再びその場に赴くと、預言者は起きておられ、次のように言われた。

「アッラーの外に神はなし、と言い、信仰を保ったままこの世を去るものは、誰であれ天国に入らないことはない」

私は「不義を働いたり、盗みを行ったりしてもですか」と尋ねた。**すると「そう、不義を働いたり、盗みを行ったりしても」**と答えられた。私は再度「不義を働いたり、盗みを行ったりしてもですか」と尋ねた。預言者は**「不義を働いたり、盗みを行ったりしても、天国に入るだろう」**と言われた。私は三たび、「アッラーの使徒よ、不義を働いたり、盗みを行ったりしてもですか」と尋ねた。**「そう、アブー・ザッルの顔が地面に引き下げられ、卑しまれたとしてもなお、天国に入るだろう」**と預言者は言われた。[17]

この章句や多くのハディースは、罪を犯した者が信仰から逸脱するのではなく、ただ罪を負うのだということを示している。

これによって、ハワーリジ派とムーテジレ派が論拠として示した章句やハディースは、外見上の意味ではなく「成熟した信者ではない」というように解釈されている。預言者の時代から今日まで、この解釈が採用されているのである。

結論：信仰において何より尊重されるべきは心である。誰であれ、アッラーと、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がもたらした教えを心から認め、信じるのであれば信者となる。心で認めたことを言葉で表現することは絶対条件ではないとしても、人びとによって信者であると認識されるために、例えば

17　ブハーリー、リバース、24、ムスリム、イーマーン、40

葬儀の礼拝をしてもらったり、信者のための墓地に埋葬してもらったりというようなイスラーム法の適用を受けるために必要となる。**信仰は心と言葉による承認、**という表現が使われるのはこのためである。本来心から信じている者は誰であれ、アッラーの御許で信者なのである。その人が、何らかの理由で崇拝行為を行わず、大きな罪を犯したとしても、信仰を捨てたことにはならず、ただ罪を負うことになるだけである。

宗教的実践は信仰の基盤の一部ではないが、信仰と実践の間には緊密な結びつきがある。アッラーがお気に召されるのは、成熟した信仰の持ち主であり、心と言葉で認め、行いで実践する人なのである。

信仰と道徳

信仰と道徳的義務の間には大きな結びつきがある。道徳的義務も、宗教的実践と同様、信仰を成熟させるものである。イスラームの目的は、人を美徳の持ち主とし、成熟させることである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の、**「私は、立派な徳を完成させるために遣わされた」**[18]という言葉がこれを示している。

この点に関しては多くのハディースがあるので、そのいくつかを例として示してみよう。

「信仰は70あまりの部分にわけられる。そのうち最上のものが、アッラーの外に神はなし、と唱えることであり、最も下位に位置するものは、道を行く人のために、苦痛を与えるようなものを取り除くことである」[19]

18　ムワッタア、ホスヌル・ホルク、1

19　ムスリム、イーマーン、12

「信者たちのうち、最も完成した信仰を持つ者とは、最も優れた徳を持つ者である」[20]

預言者が、

「誓って言うが、信仰したことにはならない。誓って言うが、信仰したことにはならない。誓って言うが、信仰したことにはならない。」

と言われ、それを聞いた人びとは、

「アッラーの使徒よ、信仰したことにならないというのは誰のことですか」と尋ねた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は答えて言われた。

「その隣人が、不正であり、悪いということでその人を信用していない、人物のことである」[21]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の、「信仰したことにはならない」という言葉の意味は、「完全な意味で信仰したことにはならない」、というものである。なぜなら宗教的実践が信仰に含まれるものではないのと同様に、道徳も信仰に含まれるものではないからである。しかしそうはいっても、信仰と宗教的実践、信仰と道徳との結びつきは非常に強いものだ。それをそれぞれ別にして考えることはできない。完成された信仰のためには宗教的実践や道徳が必要であることは疑う余地もないことである。

包括的な信仰（イジュマーリイ・イーマーン）と解釈的な信仰（タフスィリー・イーマーン）

信仰は、包括的信仰と解釈的信仰の二種類に分類することが

20　ティルミージィー、イーマーン

21　ブハーリー、アダブ、29

できる。

包括的信仰（イジュマーリイ・イーマーン）：信仰されるべき事項を、まとめて信じること。アッラーの外に神はなく、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアッラーのしもべであり、使徒である、と唱え、これを心から信じる人は、包括的に信仰している、ということができる。

解釈的信仰（タフスィリー・イーマーン）：預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がアッラーからもたらされた事項のそれぞれを一つ一つ理解し、信じることである。アッラーを、天使を、啓典を、預言者たちを、最後の審判の日を、死後の復活を、天国と地獄を、運命を、礼拝や断食や喜捨が義務であることを、それぞれ信じることを解釈的信仰というのである。

信仰が完全とされ、承認されるための条件

それには三つの条件がある。

1　信仰は絶望的状況に陥ってからのものであってはならない。つまり、人が、生きる望みを失い、死と向きあったのちに信仰したとしても無効になる。だから信仰は、その段階に至るまでおくらせてはいけないのである。

2　信仰する人は、宗教的に絶対である何らかの規範に対して、それを否定するような言動に出たりしてはいけない。例えば、明確な宗教的規範である礼拝、断食、巡礼、喜捨といったような事項を否定する人、そんなものは存在しないという人は、教えを放棄したことになる。なぜなら教えの規範は一つの完全な形であり、そのうちの一でも否定するなら、それは全てを否定したことになるからである。

3　アッラーと、アッラーからもたらされた全てのものを信じる人は、宗教上の規範が全て素晴らしいものであると認めなければならない。それらを区別してはならない。宗教的規範のどれか一つでも、気にいらないとして見下すことは、信仰が失われていく要因となる。

信仰に多寡はない

先に、信仰は心と言葉による承認から成り立つと述べた。アッラーと、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がアッラーからもたらされた全てを信じる人は、信者となる。

ここにおいて、信仰が多いか少ないかの区別はない。アフマドの信仰は篤いがハサンの信仰は薄い、ということはできない。人は、信じるか、信じないかのどちらかである。

信仰の対象を考えても、信仰は増減しないことがわかる。信仰されるべきは
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）によってもたらされたもの全てであるからだ。そのなかの一部を信じて、一部は信じないというようなことは、信仰ではない。預言者ムハンマドは信仰について語られる際、アッラーを、天使たちを、預言者たちを、死後の復活を、定められた運命（カダーとカダル）を信じることだ、といっておられる。だから、誰かがその一部を信じなかったとしたら、残りの部分を信じていたとしても、信仰していることにはならない。

崇拝行為や善行は、信仰を確かなものとし、行う人を成熟した信者に育てる。そうした行いが十分でない人は、信仰の弱さと見ることができる。正しい宗教的実践で信仰が強さを増すことを示すクルアーンの章句やハディースは、このように解釈さ

れている。つまり、宗教的実践と崇拝行為は信仰を高める。崇拝行為の不足は、信仰を弱める原因になる。一人の信者の信仰と預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の信仰は、信じるという点において同じであったとしても、その強さと堅固さにおいては同じではないのである。

信仰とイスラーム

「イスラーム」とは、辞書で見ると帰依する、従う、という意味でなる。

宗教用語としての意味は、アッラーに帰依し、従うことである。これは預言者ムハンマド（彼のうえに平安あれ）によってもたらされたものを受け入れることによってのみ可能となる。

この意味におけるイスラームと、信者との間には違いはない。信者はムスリムであり、ムスリムは信者である。

「イスラーム」という語は、時には、心からではなく言葉上、降伏という意味でも使われる。

「砂漠のアラブたちは、私たちは信仰します、と言う。言ってやるがいい。あなた方は信じてはいない。ただ、私たちは入信しました、と口で言っているだけで、信仰はまだあなた方の心の中には入っていない。」[22]

この節はそうした意味で使われている。本来、真の信仰とイスラームという言葉の間に差はないのである。

信仰と憎悪

憎悪、クフルとは辞書で見ると「覆う」という意味である。目に見えているものを闇で覆ってしまっていることから、夜の

22　第49章　部屋章14節

ことを「カーフィル」と呼ぶ。農民についても、種を土に埋める、というところから同じ名前が付けられている。

信仰におけるクフルとは、アッラーの存在や唯一性といった信条の基本を信じないことを指す用語である。行為としてのクフルは、恵みに対して恩知らずな振る舞いのことを意味している。

クルアーンでのクフルという言葉は、この両方の意味で使われている。

ここでは、信仰における覆い（クフル）について取り上げることにする。これは不信心を意味する。現世においてムスリムとしての扱いを受けることなく、来世では永遠に地獄にとどまることを意味する。クルアーンでは次のように述べられている。

「あなたがたの中で、もし信仰に背き、不信心者のままで死ぬ者があれば、このような者は現世でも来世でもその行いは徒（あだ）となる。またこれらの者は、業火の住人である。彼らは永遠にその中にすむ」[23]

不信心は人にとって大きな災いだ。死後の復活、現世での行いをアッラーの裁きの前に提出すること、任務を果たせば来世では報償があること、否定する者には地獄での罰があること、これらを信じない人は、頼っていたものを失って空虚に陥る。現世の生活しか信じない者、死後は無に帰すことを信じる者は心の安らぎを失う。だから信じないことは人にとって大きな災いなのである。

23　第2章　雌牛章217節

第二章　信仰の基本

信仰の基本は六つある。有名なジブリール・ハディースにおいて、大天使ジブリールは預言者ムハンマドに

「信仰とは何か。」と尋ねると、預言者ムハンマドは、

「アッラーを、アッラーの天使たちを、経典類を、預言者たちを、そして審判の日についての信仰、それから善悪に対する天命（カダル）を信ずることです」[24]と述べ、信仰の基本を明らかにされたのである。

アッラーを信じること

アッラーへの信仰

人の、第一の義務はアッラーを知り、アッラーを信じることだ。

アッラーとは、存在が必須であり、凡ての称賛に値する、創造主の美名である。

アッラーは存在し、その存在は必須なのだ。その存在の為には、他のいかなる存在の支えも必要としない。だからこの言葉は、真に崇拝の対象であり、唯一の創造主であるお方特有の美名だ。そのお方以外のいかなる存在にも、その名前は与えられないのである。

アッラーを信じることは、その存在とその偉大なる特質を知り、それらを認めることによって実現する。

アッラーのあられ方を、この世界での生において私たちが感

24　ブハーリー、イーマーン、37；ムスリム、イーマーン、1

覚器官で認識することはできない。そのあり方は何ものとも異なるものであるからだ。だから、アッラーを何かに例えて認識することはできない。クルアーンでも、

「目はそのお方を認識できない。」[25]

と記されている。その存在は、人の目が認識できるものではないのだ。

だから私たちは、アッラーの存在をその特質によって知り、理解するのである。

アッラーの特質

アッラーの特質は、ザート（そのお方に帰されるもの）とスブート（確実であるもの、必須条件であるもの）二種に分けられる。このうちザートが六つ、スブートが八つで、計14になる。

ザートの特質：

これらの特質はアッラーに関する必須事項であり、その逆を考えることはできない。つまり、これらの逆によってアッラーを特質づけることはできないのである。例えば、アッラーは存在する。この逆は、存在せず、ということになる。アッラーは、存在しないと規定することはできない。この種の特質は以下の通りである。

ヴジュード：確実に「おられる」ということである。アッラーは存在する。その存在の理由はアッラーご自身である。だからアッラーのことを「ワージブル・ヴジュード」と呼ぶ。アッラーは存在において、そしてその継続において、いかなる支えも必要とされない。

25　第7章　高壁章3節

クデム：アッラーは、始まりのない存在であられる。つまり、その存在に、始まりがないのだ。アッラーはこの時期までは存在されなかったがその時期以降は存在される、とはいえないのである。

もし、アッラーが始まりのないお方でなかったとしたら、つまり、後から存在されるようになったというのであれば、その創造主が必要となる。なぜなら後から存在するようになったものには、それを存在させたものが必要であるからだ。しかし先にも述べたようにアッラーはその存在が必須であり、誰の助けをも必要とされないのである。

ベカー：アッラーの存在には終わりはない。例えば、私たちのような、存在に始まりがあるものは、一定時間の後にはその存在は終わりを告げる。アッラーは死ぬことはなく、常に存在し続けられる。クルアーンにおいて、

「かれの御顔の外凡てのものは消滅する。採決はかれに属し、あなたがたは（凡て）かれの御許に帰されるのである。」[26]

と述べられている。そしてアッラーが永遠に存在されること、存在に終わりがないことが示されているのだ。

ムハーラファトゥン・リル・ハヴァーディス：後から創造されたものには似ないという意味である。世界を、そして世界の存在する全てを創造されたのはアッラーだ。被創造物はどれであれ、アッラーに似てはいない。アッラーは比べられるものの何もない、崇高なお方なのだ。クルアーンでも

「かれに比べられるものは何もない。」[27]とされている。

クヤーム　ビネフィシヒー：アッラーの存在がそのお方ご自身によるもので、他の何かによるものではないという意味である。

26　第28章　物語章88節
27　第42章　相談章11節

ワフダーニッヤ：アッラーの唯一である。この世を、そして世に存在する全てを創造され、生かされておられるアッラーは、あらゆる意味で唯一の存在なのだという意味である。

その存在が必須であることから、存在のあり方においても唯一だ。

アッラーはその特質においても唯一であられる。なぜならその特質において、比較できるようなものは何もないからだ。例えば、アッラーには英知あるお方という特質がある。この特質は人間にもあるものだ。しかしアッラーにおいてこの特質は終わりなくまた始まりもない永遠のもので、全てを網羅している。人の知識は後からのものであり、常に変わり得るし、消失することもありうる、非常に限られたものである。

アッラーは、その業において、創造において唯一であられる。この世界全てを創造されたのはこのお方なのだ。アッラー以外に、崇めるにふさわしい存在はない。崇拝はアッラーに対してのみ行われる。助けは、ただこのお方から待たれるのである。

そう、アッラーはあらゆる意味で唯一の存在であられる。クルアーンでも、

「あなたがたの神は唯一の神（アッラー）である。かれの外に神はなく、慈悲あまねく慈愛深き方である。」[28]と記されている。

クルアーンの、最も短い章の一つである純正章では、次のように記されている。

「言え。『かれはアッラー、唯一なるお方であられる。アッラーは自在され、お産みなさらないし、お産まれになられたのではない。かれに比べ得る、何ものもない。』」

この世界にある均整と秩序、自然界の法則がお互いに適合し

28　第2章　雌牛章163節

あっていることが、アッラーの唯一性、比べられるものが何もないことの明らかな証拠である。

もしアッラー以外にも神がいたとしたら、この秩序はなかったであろう。クルアーンでも、

「もし、その（天地の間に）アッラー以外の神々があったとしたならば、きっと混乱したであろう。それで王座の主、かれらが唱えるものの上に（高くいます）アッラーを唱えなさい。」[29]と語られ、アッラーの唯一性の強い論拠を示している。

もし、複数の神がいるとするなら、それらがお互いにわかりあえるか、わかりあえず別行動をとるかのどちらかだ。お互いに理解し合った場合、共同で世界を統治した場合、片方がもう片方を頼りにしていることになる。しかし、支えを必要とするような存在であれば神ではない。もし、支えを必要としていないのであれば、もう片方の神はそもそも必要ないことになる。だから、アッラーは唯一なのだ。逆に、複数の神がお互いに理解し合えなければ、片方が行ったことに別の神が反対するようなことになり、この世界には秩序はなくなる。天地は混乱し、破壊されたことであろう。

しかしこの世界には完全な秩序がある。全てがあるべきところに存在し、不足するものもない。だから、アッラーは唯一であられるのだ。外（ほか）に神は存在しないのである。

スブートの特質

ハヤート：アッラーは、真の、そして永遠の命をもたれている。生あるもの全てに、このお方が命を与えられている。

クルアーンでは次のように述べられている。

29　第21章　預言者章22節

「アッラー、かれの外に神はなく、永生に自存されるお方。仮眠も熟睡も、かれをとらえることはできない。」[30]

イリム：アッラーがご存じである、ということを意味する。アッラーは、天と地に存在する全てのことをご存知だ。人が心に秘めていることでさえ、知っている。アッラーがご存知でないものは何もない。クルアーンでは、

「本当に地においても天にあっても、アッラーに隠す何ものもない。」[31]と記されている。

イラーダ：アッラーが望まれることを意味する。アッラーは望まれ、また望まれたことを実践される。この点においていかなる力であれ並ぶことはないのと同様に、いかなる援護も必要としない。

クルアーンでは次のように記されている。

「何かを望まれると、かれが『有れ。』と御命じになれば、即ち有る。」[32]

クドゥラ：力が十分であることを意味する。アッラーのお力は全てに対して十分だ。力が足りないこと、できないことなどは何もないのだ。クルアーンでもこのように言われている。

「アッラーは全てのことに全能であられる。」[33]

サミイ：聞くこと、を意味する。アッラーは、遠近を問わずあらゆるものをお聞きになる。更には、私たちの心の中の声まで聞かれるのだ。何かを聞く為に、私たちのようにその為の器官を必要とされることもない。クルアーンでは次のように記されている。

30　第2章　雌牛章255節
31　第3章　イムラーン家章5節
32　第36章　ヤースィーン章82節
33　第3章　イムラーン家章29節

「本当にアッラーは、全聴にして全知であられる。」[34]

バサル：見る、という意味である。アッラーは全てをご覧になる。遠近や、覆われているかいないか、明るいか暗いかなどは問題ではない。私たちがいつ、どこで何をしたのかということに至るまで、全てをご覧になる。見る為に、私たちのように目を必要とされることもない。

カラーム：語る、という意味である。アッラーは語られる。しかし私たちのように文字や声を必要とはしない。クルアーンやその他の啓典はアッラーのお言葉である。

タクヴィン：創造する、という意味である。世界と、世界にある全てを創造され、生かされ、育まれるのはアッラーである。このお方以外に創造主はいない。

これらがアッラーの特質であり、こういった特質によってアッラーは理解され、認識される。アッラーを信じるということは、アッラーがこれらの特質をもたれていることを信じるということである。

まとめると、次のようになる。アッラーは存在され、存在は必須だ。存在には始まりも終わりもない。唯一であられ、何ものであれ比較になるものはない。何かの援護を受けられることはない。永遠の生の持ち主であられる。望まれ、それを実行される。全てを知り、全てを聞き、また全てを見る。全てに十分な力をお持ちである。文字や声を必要とすることなく語られる。世界と、世界にある全ての創造主であられる。

アッラーは、始まりも終わりもないお方だ。その存在には始

34　第2章　雌牛章181節

まりがないのである。

「アッラーの御手が彼らの手の上にあり…」[35]

「だが（永遠に）変わらないものは、尊厳と栄誉に満ちたあなたの主の慈顔である。」[36]

これらの章句での、アッラーの御手、アッラーの慈顔という表現は、文字通りの意味を示しているのではない。なぜならアッラーは被造物のいずれにも似ておられないからだ。このような形で使われる手や顔とは、力、その存在、といった意味を持つのである。

アッラーは目に見える存在なのか

アッラーが目に見えるかどうかということについては、理屈としてはあり得るとされ、伝承によっては確実とされている。不可能だとはされていないのだ。ただ、イスラームの知識人たちの大多数の見解としては、この世ではアッラーを見た者は誰もいない。信者たちはあの世で、アッラーを拝見する幸福を得るのであろう。クルアーンでも、次のように記されている。

「その日、或る者たちの顔は輝き、かれらの主を、仰ぎ見る。」[37]

預言者ムハンマドも、

「あなた方は必ず、満月を見るようにあなた方の神を見るであろう。そのお方を拝見することによって不当とされることもなく、混乱することもないであろう。」[38]と語られた。

35　第49章　勝利章10節

36　第55章　慈悲あまねくお方章27節

37　第75章　復活章22、23節

38　ブハーリー、タウヒード、24；ムスリム、イーマーン、81

天使の存在を信じること

信仰の二番目の条件は天使たちの存在を信じることである。

天使たち

天使とは、アッラーが光から創造された存在である。天使たちには男女というものはない。食事をすることも、眠ることもしない。疲れることも、病気になることもない。アッラーが望まれる限り生きる。地にも、天にも、どこにでも存在しえる。

天使たちはアッラーの命令に従い、アッラーに逆らうことはしない。クルアーンでも、

「かれらはアッラーの命じられたことに違反せず、言い付けられたことを実行する。」[39]とされている。

ハールートと、マールートという名の天使たちが罪を犯し、アッラーに反抗したという伝承は根拠のないものである。

天使たちは、その任務によって三つに分けられる。

第一のグループ：「イッリッユーン」、「ムカッラブーン」と呼ばれるもので、常に「アッラーの他に神はなし」と唱えたり、アッラーにはいかなる欠点もないことを唱念したりするグループである。

第二のグループ：「ムダッビラート」と言われるもので、この世界の秩序に関する任務に携わっているグループである。

第三のグループ：預言者たちにアッラーの意を伝える任務を帯びていたグループである。預言者ムハンマドにアッラーの命令と禁止事項を伝えたのは、ジブリールという名の天使であった。

39　第66章　禁止章6節

主要な大天使たち

ジブリール：アッラーと預言者ムハンマドの間の使者となった天使。

ミカーイル：自然界の出来事に関わる任務を負っている天使。

イスラーフィール：最後の審判の日の為、そして人間が死後復活する為笛を吹く任務を持つ天使。

アズラーイール：命を回収する任務を負う天使。

さらに、これらに続くものとして、常に人間と共にいて彼らが行った善行や悪行を記している天使が存在する。この天使たちは「ハファザ」、もしくは「キラーメン・カーティブィーン」と言われる。

クルアーンでは次のように記されている。

「本当にあなた方の上には二人の看守（天使）がいるが、かれらは気高い記録者で、あなた方の所業を知っている。」[40]

天使には、人の死後問いかけをするものもいる。ムンケル・ネキルもしくはムンケレインと呼ばれているものだ。知られていない為、この名前で呼ばれているのである。

天使たちはこの上なく力強い存在だ。我々にはできないことを容易に成し遂げる。到達することのできないところへも即座に到達することができるのだ。

天使の数は、アッラーのみがご存知である。

天使たちはなぜ目に見えないのか

天使たちが存在し、どこにでもいるのにもかかわらず、私たちは彼らを見ることができない。なぜなら彼らは霊的な存在なのだ。私たちの目は、彼らを見ることができるように創られていない。私たちは天使のみならず、疑いなく存在する多くのものを見ることができずにいる。自分たちの精神も見ることはできない。しかしその存在は信じているのである。

存在するすべてのものが目に見える必要もない。何かを見ることができないからと言ってその存在を否定することはできない。天使たちの存在はクルアーンが伝えているものであり、預言者たちは彼らを見たのである。

天使たちは人間よりも優れているか

天使たちを信じることが義務であるように、彼らに敬意を示し、彼らを貶めるような言葉や振る舞いをさけることもまた、義務である。

預言者たちは、すべての天使よりも上位に位置する。先に名前と任務を紹介した、天使たちの預言者とされる四大天使は、預言者以外の人間よりも上位にいる。

信仰し、アッラーへの畏怖を持つ人間は、四大天使以外の天使よりも上位に位置する。なぜなら、天使には理性はあるが欲望がない。人には理性も欲望もある。もし人が知恵を生かして行動し、欲望を理性でコントロールできれば、アッラーの観点から天使よりも上位にあることになるのである。

ジンとシャイターン

天使以外にも私たちが見ることのできない、しかし存在には疑問の余地がない創造物は存在する。これらの存在はクルアーンで伝えられている。

40　第82章　裂ける章10、11節

ジンは、人より前に創造された。ジンたちは、アッラーの許しを得て様々な形をとることができる。アッラーの許しがなければ誰にも害をなすことはできない。

ジンも、人間のようにアッラーを知り、崇拝行為を行う義務を持っている。クルアーンでは、

「ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため。」[41] と語られている。

更に、クルアーンは、ジンたちが預言者ムハンマドがクルアーンを読まれるのを聞き、信仰し、それからジンの社会にそれを伝えたことを述べている。[42]

シャイターンもジンである。私たちはそれを見ることもでない。クルアーンが伝えているから、その存在を信じるのだ。

シャイターンは最初の人間であるアーデムより前に創造された。長い間、アッラーに崇拝行為を行い、天使たちと共にいた。

アッラーはアーデムを創造されると、天使たちに、アーデムにサジュダするように命じられた。全ての天使たちはそれに従った。シャイターンはそれに従わず、

「私はかれよりも優れております。あなたは私を火から御創りになりましたが、かれを泥で創られました。」[43]

と言い、アーデムにサジュダをせず、アッラーの命令に従わなかった。

アッラーはそれに対して、

「それならあなたはここから下れ。本当にあなたは呪われている。」[44]

とおっしゃられた。悪魔は、

41　第51章　撒き散らすもの章56節
42　第72章　アル・ジン章1、2節
43　第7章　高壁章12節
44　第15章　アル・ヒジュル章34節

「主よ、彼らが甦される日まで、私を猶予してください。」[45]

と言い、生きる許しを求め、それは与えられた。[46] その後シャイターンは、地上に生きる人間たちをアッラーへの道から遠ざけ、惑わせることを告げつつ、アッラーのもとから去ったのであった。[47]

クルアーンでは**「イブリース」**とも呼ばれているシャイターンを、アッラーは人間の敵だとされ、またそのように認識されることを望まれておられる。

ジンのうち、信仰を持たないものは、シャイターンの援助者である。

啓典を信じること

信仰の条件の一つが、アッラーの書を信じることである。

アッラーは僕たちに命令や禁止事項を、預言者たちを介して下された書で、教えられている。人々はこれらの書のおかげで真実を知り、輝きを与えられたのである。

アッラーは使途や預言者たちに、これらの書を啓示によってもたらされた。その為、ここで簡単に啓示について述べたいと思う。

啓示（ワヒー）とその分類

啓示（ワヒー）とは、アッラーが預言者たちに、望まれることを特別な形でお知らせになることである。クルアーンでは、啓示について次のように記されている。

「アッラーが、人間に（直接）語りかけられることはない。

45　第15章　アル・ヒジュル章36節
46　第15章　アル・ヒジュル章37節
47　第15章　アル・ヒジュル章38節

啓示によるか、帳の陰から、または使途（天使）を遣わし、かれが命令を下して、その御望みを明かす。本当にかれは、至高にして英明であられる。」[48]

この節において啓示は三つに分類されていることが確認できる。

ア）**イルハーム**：アッラーは、お望みのことをその僕（預言者）の心に直接、瞬時に与えられる。これを、「**ワヒイ・ハフィッユ**」、秘められた啓示、あるいは言葉にされない啓示、と呼ぶ。預言者ムハンマドの、クルアーン以外で「**アッラーはこのようにおっしゃられる**」というお言葉が、この種の啓示である。「**ハディース・クドゥスィー**」（聖なるハディース）、と呼ばれるものだ。この場合、その内容はアッラーから伝えられたものであり、それをご自身の言葉で表現されているのである。

イ）**書物によって**：この方法において、預言者は何かを見ることなく、自らに下された言葉を聞く。預言者ムーサーは、トゥール山で木陰に座っている時、自らに下された啓示を聞いたのであった。

ウ）**天使によって**：天使ジブリールが預言者にもたらした啓示である。これを、**ワヒイ・マトゥルウ、唱えられ、言葉としてもたらされた啓示、**と呼ぶ。啓示のうち最も崇高なものがこれだ。その為、啓示と言うとこの種の啓示が思い起こされる。クルアーンは預言者ムハンマドに、このように下された。つまり、クルアーンは言葉という形で、下されたのである。

啓示を伝えた天使ジブリールは時として人間の姿で預言者ムハンマドのもとにやってこられ、アッラーのご命令を伝えた。

これ以外の啓示の一種として、アッラーは望まれたことを預言者たちに夢として知らせる。預言者イブラーヒームの息子イスマイールが犠牲として捧げられるということも、このようにして伝えられたのである。

預言者ムハンマドも預言者としての初期の頃にはこの形で啓示を受けられた。

啓示は預言者のみを対象とする。それ以外の者に啓示が下されることはない。

アッラーの友とされる僕たちに時折もたらされるアッラーの意と啓示を混同してはならない。この二つは異なる者である。啓示によって預言者に伝えられるものは絶対であり、それに従うことは預言者の義務である。それをそのまま伝える責任を負っている。アッラーの友である僕たちにもたらされる霊感はこれとは異なる。啓示のようにはっきりしたことを伝えるものではないからだ。アッラーから下されたことが確実であるクルアーンやスンナに適応している霊感にそれを受けたものは従うことができるが、他者にとってそれに従う義務はない。クルアーンとスンナに合致しない霊感に関しては、それを受けたものでさえ従ってはならない。何故なら、宗教の基本、根本はクルアーンとスンナである。これらに反するような霊感は、証拠でも、従うべきものでもない。

神聖な書物

人々に教えを伝える目的で、預言者たちにはアッラーから書が伝えられた。短いものを**スホゥフ**、それ以外を四大啓典と呼ぶ。

48　第42章　相談章51節

スホゥフ：

10頁、預言者アーデム（彼の上に平安あれ）に
50頁、預言者シト（彼の上に平安あれ）に
30頁、預言者イドリス（彼の上に平安あれ）に
10頁､預言者イブラヒーム（彼の上に平安あれ）に下された。

今日これらのものは一切残されていないのである。

四大啓典：

タヴラート（旧約聖書）､預言者ムーサー（彼の上に平安あれ）に、

ザブール、預言者ダーウッド（彼の上に平安あれ）に、

インジール（新約聖書）､預言者イーサー（彼の上に平安あれ）に、

そしてクルアーンが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に下されたのである。

タヴラート（旧約聖書）: 預言者ムーサー（彼の上に平安あれ）に下されたタヴラートの原本は今日残っていない。現存するものは後の時代に書かれ、付け加えや削除が行われた状態のものである。原本からそのまま残されている部分ももちろんある。しかし全てがアッラーの言葉であるということはできないのだ。

タヴラートにはヘブライ語、ギリシア語、サミル語と主に三つの本があるがこれらもお互いに一致していない。クルアーンは、タヴラートが変化させられていることを伝えている。

ザブール: ダーウッド（彼の上に平安あれ）に下された書であるが､現存しない。わずかに一部の章句が残っているだけで、残りは失われている。

インジール（新約聖書）: これも、ラヴラートと同様原本は残されていない。今日キリスト教徒たちが手にし、新約聖書として知られている書は、アッラーが預言者イーサー（彼の上に平安あれ）に下されたものとは異なっている。彼よりもずっと後の人間が書いたものである。キリスト教徒たちに承認されている四つの版はお互いに一致しておらず、どれかに書かれていることは他のものには書かれていない、といった状態である。

現在、キリスト教徒たちの手には、ルカ、マタイ、ヨハネ、マルコの四人によってそれぞれ書かれた四つの異なるインジールがある。これ以外にも多数あったが西暦325年に開かれたイズニックの宗教会議で焼却処分を受けた。この四つのみが残されたのである。

我々イスラーム教徒は、アッラーがクルアーン以前にこの四つの啓典と短い書を下されたことを信じる。しかし、今日現存するこれらの名前が完全にアッラーからの啓典であると認めることはできない。なぜならこれらは変化させられているからだ。同じ名前を持つ複数の本があること、それらがお互いに異なることは、これらに手が加えられていることの証拠である。

クルアーン: クルアーンは最後に啓示された啓典である。

クルアーンは一度にまとめて啓示されたのではなく、少しずつ、23年をかけて下され、完成された。

クルアーンは比類なき啓典である。それは人間の言葉ではなく、アッラーのお言葉なのだ。表現も、内容も、アッラーによるものなのである。

クルアーンは、それ自身がアッラーによって啓示されたものであることを示している。それを疑うものに、クルアーンに似た書物を見るように呼びかけ、それに成功できないであろうことも表明している。

クルアーンは、アラブ人たちが詩や呼びかけにおいて頂点に達していた時期に啓示された。メッカの偶像崇拝者たちは、クルアーンの、人の心を照らす光を消すことをもくろみ、

「クルアーンに耳を傾けてはならない。そしてその（読誦）中にしゃべりまくりなさい。そうすればあなたがたは圧倒できる。」[49] と言い出すほど、あらゆる手を尽くした。しかしそれに対抗できるようなたった一つの章も作ることはできず、その為武器に頼るしかなくなったのであった。

クルアーンはイスラームの基本の書物である。教えの基盤なのだ。宗教的規範がよりどころとする四つの根拠の一つである。教えの基盤を全て包括するクルアーンは、それ以前の経典の要約のようなものである。信仰、道徳、実践、社会などあらゆる項目において人を、そしてその社会を精神的にも物質的にも幸福にするための全てを伝えているのである。

クルアーンは人々のために、紙の庇護の源として送られた書物である。

クルアーンは何よりもまずアッラーの存在と唯一性を、その至高なる特質を、被造物に対する慈悲を、その御許しが大きな

49　第41章　フィッスラ章26節

規模であることを、示している。迷信的な信仰、偶像崇拝などを否定する。人を高めるための最も崇高な、そして不変の原則を示すのである。

クルアーンは家庭生活や夫婦の互いの権利から民族間の関係まで、挨拶から家に入る際の許しに至るまで、社会生活上の全ての規則を示している。そして最も高度な、道徳的な原則を教えている。

クルアーンは、姦淫や売春、飲酒、殺人、虚偽、誹謗中傷、権利の侵害や窃盗、浪費、背信、破壊行為など、社会を根底から揺るがすような悪行を禁じている。

要するに、クルアーンは人を、この世とあの世で幸福にする為全てを包括する書物なのである。

このように、クルアーンをはじめとしてタヴラート、ザブール、インジール、その他の短い書物群がアッラーによって送られたこと、このうちクルアーンを除くものは変更が加えられていること、クルアーンは啓示された時以来一文字でさえ変更されてはいないこと、私たちはこれらを信じ、その信仰を死ぬ時まで守り抜くのである。

預言者達を信じること

信仰の基本のまた一つが、預言者達を信じることである。

預言者とは、アッラーが人々に正しい道を示すために任務を与えられた、選ばれた人々のことである。つまり預言者は、アッラーと人間の間の使者だ。アッラーのご命令や禁じられたことを、人々に伝える。

預言者達の一部には啓典が下された。彼らを一般的に**「ラスール（使徒）」**と呼ぶ。啓典が下されなかった預言者もおり、彼らは**「ナビー」**と呼ばれる。彼らは自分より以前の預言者に下された啓典に従い、宗教的実践を行い、布教をする。複数形では「アンビヤー」となる。

啓典が下された預言者をナビーということはできるが、啓典が下されなかった預言者をラスールと呼ぶことはできない。言い換えれば、ラスールは全て、同時にナビーでもあるが、ナビーの全てがラスールではない、ということである。

人々は預言者を必要とする。なぜなら人は、自分の知恵だけで全てを知ることはできないからだ。アッラーを、自分の知恵で見つけることは可能である。なぜならこの世界、そしてこの世界に存在する被造物の繊細さ、調和、完璧な配置などを追求すれば、それらが勝手にできるものではないことを、創造主がいることを理解できるのだ。この世界では何もかもが完全に正しい位置に配置されており、これらが勝手にそうなることは不可能である。

しかし、その創造主にどのような崇拝行為を行えばいいのか、何を命じられて何を禁じられているのか、ということを知ることはできない。これらを私たちに教えるのが預言者たちだ。だからアッラーは、預言者を遣われなかった人々には罰を与えない。クルアーンで、

「われは（警告のため）一人の使徒を遣わさない限り決して懲罰を下さない。」[50] と語られる。

アッラーが預言者を遣わされる理由の一つが、最後の審判の日、人々が**「アッラーよ、私たちはどうやって崇拝すればいいのか知らなかったのです」**と弁解することのないように、というものである。アッラーは次のように語る。

「使徒たちに吉報と警告を齎せたのは、彼らの（遣わされた）後、人々にアッラーに対する論争がないようにするためである。本当にアッラーは、抜かりない立証者であられる。」[51]

預言者であることはどのように確定されるか

預言者であることは、奇跡によって確定される。預言者であることを主張するものは、その主張の正当性を、奇跡を起こすことによって立証するのである。

ここでの奇跡とは、預言者としての任務を負ったことを告げる人の言葉を立証する為、アッラーの力によって示された、超常現象である。奇跡は預言者が求め、アッラーが創造されるのである。

奇跡は、一人の預言者が預言者であることの証拠だ。アッラーのお許しと創造がない限り奇跡は起こらない。

全ての超常現象が奇跡というわけではない。奇跡の定義から明らかなように、そういった現象を起こした人は預言者であることを主張し、また要求された形でも、それを示すことになる。もしその人が、預言者であることを言っていなければそれは奇跡ということはできない。超常現象が宗教的義務を果たし、悪行や罪から身を守っている信者によって起こされた場合、それは「カラーマト」と呼ばれる。アッラーの友である人々のカラーマトは、預言者にとっての奇跡であるわけだ。

このような超常現象は信じない人の手によって行われることも可能である。この場合の出来事を、「イスティドラージュ」

50　第17章　夜の旅章14節

51　第4章　婦人章165節

という。

預言者になければならない特質

預言者にはなければならない五つの特質がある。正直さ（スィドゥク）、信頼（アマナート）、布教（タブリーグ）、英知（ファターナト）、潔白さ（イスマト）がそれである。

正直さ（スィドゥク）：預言者たちは正直で誠実な人々である。絶対に嘘をつかず、策略を働かず、権利の侵害もしない。彼らが語る教えに関わること全てはアッラーからもたらされたものであり、正しいことである。「こうなったのだ」と語ったことは事実そうであったのであり、「こうなるだろう」と語ることは実現するのだ。

預言者たちは、預言者になった後のみでなく、預言者になる前から、嘘をつかず、また誰かをだますこともなかった。

信頼（アマーナト）：預言者はあらゆる意味で信頼できる人々である。義務は要求される形で果たし、信託も守っていた。

布教（タブリーグ）：伝えること、という意味である。預言者たちはアッラーから啓示された全ての事項を全て人々に伝えた。本来これが、預言者たちの任務であるわけである。

英知（ファターナト）：預言者たちは最も知的で、賢明で、理解力のある人たちである。

潔白（イスマト）：罪から守られているということだ。預言者は規範である為に、アッラーは彼らを、罪を犯すことから守った。この特質は預言者以外には見られない。つまり、預言者でない人は、誰であれ潔白とは言えないのである。

預言者に備わっているべき五つの特質は、同時に、彼らをうぬぼれやねたみ、偽善といった悪い性格から救われることを要

している。

預言者に関して適当とされている特質は、他の人々にも見ることができるものである。

預言者も人である以上、私たちのように飲み食いし、眠り、疲れ、自然の要求を満たす。寿命が尽きると死ぬ。

最初の預言者アーデム（彼の上に平安あれ）から預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の到来までの間に、多くの預言者たちが現れた。彼らの数は、アッラーのみがご存知である。クルアーンでは、一部の預言者の名が伝えられており、名前が伝えられていない多くの預言者がいることが示されている。

我々はアッラーが遣わされた預言者達を信じ、またその数についてもアッラーにお任せする。

クルアーンで名前が伝えられている預言者は以下の通りである。

アーデム、イドリース、ヌーフ、フード、サーリフ、シュアイブ、イブラーヒーム、ルート、イスハーク、イスマイール、ヤークーブ、ユースフ、ムーサー、ハールーン、ダーウード、スレイマーン、アイユーブ、ズルキフル、イルヤース、エルヤサア、ザカーリッヤー、ユーヌス、ヤフヤー、イーサー、そしてムハンマド（彼らの上に平安あれ）。

これ以外に、クルアーンではズル･カルナイン、ロクマーン、ウザイルの名が挙げられている。しかし、彼らが預言者であるかどうかは示されていない。預言者とみる人々もいれば、預言者ではなく、アッラーの友であったとする人々もいる。彼らが預言者だと認められれば、クルアーンで名前が伝えられている預言者の数は28人になる。

来世（アヒーラ）を信じること

信仰の六つの基本の一つに、来世を信じることがある。

全ての生き物に終わりがあるように、この世界にも終末が訪れ、消失する。終わることのない永遠の存在はアッラーのみである。

この世界の終末が訪れると、アッラーは天使イスラーフィールに命じられ、彼は「スール」（ラッパ）を吹き鳴らす。その音と友に地上は激動し、全ての生物は死に絶えるのである。ただ、アッラーが望まれた存在のみが生き残る。それらはもっと後に死ぬのである。

クルアーンでは次のように記されている。

「スール（ラッパ）が吹かれると、天にあるものもまた地にあるものも、アッラーが御望みになられる者の他は気絶しよう。」[52]

これがイスラーフィール（彼の上に平安あれ）の最初のラッパである。このラッパの音と共に世界は滅亡する。

それが起こる時期はアッラー以外に誰も知らない。預言者ムハンマドも、その件については知らないと述べられていた。[53]

一つだけ知られていることは、ある日天と地の均衡が崩れ、太陽が消え、星が散り去り、海が沸き立ってお互いに交じり合い、山がぶつかりあって砕け、全てがめちゃくちゃになってこの世界が終わるということである。このことに疑いの余地はない。このことはクルアーンで示され、預言者ムハンマドも告げられておられるのである。

52　第39章　集団章68節

53　ブハーリー、イーマーン、37

死、墓、復活

死とは、魂が体を離れ、人がこの世からあの世へと移ることを意味する。

墓は、死んだ者が埋められる場所を指す。ここは、この世での生とあの世での生の中継点である。

死者には、墓場において最初の問いがなされる。死者が墓場に埋められるとまず、二人の天使がやってくる。ムンケル・ネキルと呼ばれるものだ。彼らは死者に、「あなたの神は誰か？あなたの預言者は誰か？あなたの教えは何か？」と尋ねる。

信者であった死者は、この問いに「私の神はアッラーであり、預言者ムハンマドであり、教えはイスラームである。」と応える。

天使たちはこの答えに喜び、死者を助ける。墓はその人にとって天国の庭園のようになり、天国の喜びをそこでそこで味わうことができるのである。

信仰しない者であれば、この問いには答えられない。その人にとって墓場は地獄の穴のような場所となる。地獄の苦しみをそこにおいて味わい始めるのだ。預言者ムハンマドは、

「墓場は、天国の庭園の内の一つの庭であるか、あるいは地獄の穴の内の一つの穴である。」[54]と述べられた。

これらの質問にとって、墓場は絶対条件ではない。何らかの理由で死後も墓場に埋められなかった者でも、例えば水中で溺死した者や焼死して灰になってしまった者などにも、この質問はなされる。

ただし、預言者たち、そして子供のうちに死んだ者たちには質問されることはない。

54　ティルミージィー、クヤーマ、26

魂が肉体から離れ、死亡した者がどうしてそんな問いに答えることができるのか、そういう状態の人がどうやって喜びや苦しみを味わうのか、という疑問を持つ人がいるかもしれない。

まず、このことを述べておこう。墓は、この世の生とあの世の生の間にある世界だ。墓場における状態をこの世界におけるあり方と比較することはできない。またこの世での基準が墓場でも通用するということは言えない。私たちは、預言者ムハンマドが墓場で起こるだろうと語られたことを信じ、そのあり方はアッラーの英知にお任せするのである。

ただ、例として、隣同士に眠りつつも異なる夢を見ている二人の人のことを挙げられるかと思う。彼らは熟睡し、身動きすることなく眠っている。一人は素敵な夢を見ている。大好きな友人たちと、美しい庭園にいる。庭園を飾るバラなどの花の芳香を味わっている。様々な木の果実をとって食べている。そのようにして幸福な時を過ごしているのだ。

もう一人は殺人犯たちと共に、牢獄にいる夢を見ている。牢獄の壁にはさそりや蛇などがいて、頭上に落ちてくる。このようにして苦痛の中で時を過ごしている。しかし私たちは、この二人がどのような状態にあるのか知ることができない。

ここで、この二人が見ている夢が長く伸びていく様子を想像してみよう。彼らが寝ている時に味わう快感や苦痛は、起きている時に味わうものと変わりないのだ。だから、目に見える形で味わうことのできる快感や苦痛は、精神的な形で人にもたらされ得るのである。

そう、このように、死者も墓場において快感、もしくは苦痛を味わう。

これ以外に、アッラーは、死者の体に快感や苦痛を味わう感覚を創造され、死者はそれによって快感や苦痛を感じる。この状態において、魂は肉体の復旧を必要とはしておらず、また墓場において動くことも必要ないのである。

あるいは、死者は墓場に入ると、その魂は肉体、あるいは肉体の一部と連動し、そのようにして死者はある種の生きかたを得る。そして、質問を理解し、それに応えたり、快感や苦痛を感じることができる状態になるのだ。これらはあり得ないことではなく、アッラーにとっては容易なことなのである。

死後の復活

この世の終末の後には全てが無に帰する。アッラー以外、生物は何ものこらない。世界はこのように、一定期間何もない状態で時を過ごす。その後アッラーは、イスラーフィール（彼の上に平安あれ）に命じられ、二度目のスール（ラッパ）を吹かせられる。そうすると全ての被造物は甦り、墓場から出てきて、集まる。これを死後の復活と呼ぶ。クルアーンでは、

「次にラッパが吹かれると、見よ、彼らは起き上がって見回す。」[55] と記されている。

この復活によって始まる、永遠の時を、復活の日という。審判や質疑応答、天国への橋、そして天国や地獄といったものがこの後に起こるのである。

死後の復活に疑いの余地はない。我々を無から創造されたアッラーは、死後復活させせられるのに十分な力を持っておられるのだ。死後復活させることは、無から創り出すことよりも容易である。クルアーンでは次のように記されている。

55　第39章　集団章68節

「かれこそは先ず創造を始め、それからそれを繰り返されるお方。それは彼にとってとてもた易いことである。」[56]

そもそも、容易さ、困難さというものは私たちにとってのものだ。アッラーにとっては問題ではない。アッラーにとって「あれ」と命じるだけで十分なことで、それはすぐに実現されるのである。

この件には疑念の余地がなく、人がいかにして無から創造されたか追求することで十分であるということが、クルアーンで記されている。

「人間は考えないのか。われは一精滴から彼を創ったではないか。それなのに見よ、彼は公然と歯向かっている。またかれはわれに準えるものを引合いに出して、自分の創造を忘れ、言う。「誰が、朽ち果てた骨を生き返らせましょうか。」言ってやるがいい。「最初に御創りになった方が、かれらを生き返らせる。かれは凡ての被造物を知り尽くしておられる。」[57]

復活の日は、報奨と懲罰の日でもある。アッラーを信じ、そのご命令に従い、禁じられたものを避けた人々はその日、アッラーによって報奨を与えられる。人がこの世で行った、些少な善行でも放っておかれることはない。同様に些少な悪でも、見逃されることはない。

クルアーンでは次のように記されている。

「一微塵の重さでも、善を行った者はそれを見る。一微塵の重さでも、悪を行った者はそれを見る。」[58]

マフシェル：死後復活した人々が集まるところ、という意味である。クルアーンの復活に関する部分で、次のように記されている。

「それは人が一斉に召集される日であり、立証されるべき日である。」[59]

ここでは人々に生前の記録書冊が渡され、行動記録が問われ、この世での行いについて裁かれるのである。

行いを記録した書冊

召集を受けた人々には、この世で行った善行や悪が記録された書冊が与えられる。この世で人と共にいて、これらを記録する役目の天使が準備したこの書冊には、いいことも悪いことも人間の行動が全て記録されている。人々は、

「ああ、情けない。この書冊とは何としたことだ。細大漏らすことなく、数えたててあるとは。」[60]

と言うのだ。この書冊は、天国へ行く者には右側から、地獄に行く者には左側から与えられる。そして、

「あなたがたの記録を読みなさい。今日こそは、あなた自身が自分の精算者である。」[61] と仰せられるのだ。

清算

人々はマフシェルの地で、興奮のうちに裁きの始まりを待つ。預言者ムハンマドが乞い願われることによって裁きが始められる。決して誰の権利も失われることはなく、不正が行われることもない。

クルアーンでは次のように記されている。

56　第30章　ビザンチン章27節
57　第36章　ヤー・シィーン章
58　第99章　地震章7、8章

59　第11章　フード章103節
60　第18章　洞窟章49節
61　第17章　夜の旅章14節

「あなたがたは、アッラーに帰される日のために（かれを）畏れなさい。その時、各人が稼いだ分に対し清算され、誰も不当に扱われることはないだろう。」[62]

その日、預言者ムハンマドから始まって、全ての人が尋問を受ける。

「それからわれは、使徒が遣わされた者たちを尋問し、また使徒たちをも尋問する。」[63]とクルアーンで仰せられておられるのである。

預言者ムハンマドも次のように語られた。

「その日、人は生涯をどこで費やしたか、体をどこで疲れさせたのか、財産をどこで手に入れてどこで費やしたのか、その知識によってどのように振る舞ったのか、尋問を受けることなくその場を離れることはない。」[64]

秤（ミーザーン）

清算の後、得られるべき権利を受け取った後に、それぞれにこの世での善行と悪行を知る為、ある秤がおかれる。クルアーンでは次のように記されている。

「量はその日、真正である…。」[65]

この秤によって人の善行と悪行が量られ、善行の方が重かった物は救われ、悪行の方が重かった物は大きな苦しみを味わうことになる。クルアーンでは次のように記されている。

「（善行の）目方の重い物は、成功する者である。また目方の軽い者は、わが印を軽んじた為自分を損なう者である。」[66]

62　第2章　雌牛章281節

63　第7章　高壁章6節

64　ティルミーズィー、クヤーマ、1

65　第7章　高壁章8節

66　第7章　高壁章8節

この秤において人が行った善いこと及び悪いことがはかられる。善い行いの方が重い人々が救われ、悪い行いの方が重い人々が大きな困難に陥ってしまう。クルアーンはこの事実を次のように語っている。

「（善行の）目方の重い者は、成功する者である。」

「また目方の軽い者は、わが印を軽んじたため自分を損なう者である。」[67]

尋問

この尋問とは、アッラーは望まれる事を直接的に人々に問うことを意味する。この最高の裁判において、人々は自分の生きている間に築き上げた成績について裁かれる。アッラーの絶対的公正さがその場において顕示されるのである。

スラート橋

スラート橋は、地獄の上に作られた、毛よりも細く、刃物よりも鋭い橋である。

すべての人々は、ここを通過する。なぜなら天国に至る為にはこれ以外に道はないからである。

これほど細く、鋭い橋をどうやって渡るのであろうか。信仰し、アッラーの命に従い、禁じられたものを避けてきた人々がこの橋を渡る際、橋は彼らの崇拝行為のあり方に応じて広さを増すのだ。だから楽に渡ることができる。

信仰しない者は橋を渡ることができず、地獄に落ちてしまう。

ここでスラート橋について書いてはみたものの、我々はこの橋についての知識に関してはアッラーにお任せする。この橋が

67　第7章　高壁章8、9節

毛より細く刃物より鋭いとされているものは、この橋を渡ることの困難さの比喩表現だという学者達もいる。

天国と地獄

天国は報奨の地だ。ここにはアッラーを信じ、命令を守り、禁止されたものから遠ざかった人が行くことができる。天国に行った者は、そこで求める全ての恵みを見つけることができる。信者たちはアッラーの美をここで眼にすることができ、永遠にそこにいるのである。

アブー・フライラの伝承によると預言者ムハンマドは次のように述べられた。

「アッラーは、『私は、よいしもべたちには、それまで見たことも聞いたこともない、人が創造することもできないものを用意した』と言われた。」

クルアーンにおけるその証拠とは：

「彼らはその行ったことの報奨として、喜ばしいものが自分のためにひそかに（用意）されているのを知らない。」[68]

地獄は、懲罰の場である。アッラーを知らない者たち、アッラーに歯向かう者たちは、ここで終わりのない罰を受けるのだ。信者のうち、罪を負っており許されなかった者も罪の分だけ罰を受け、それから地獄を出て天国に入る。

天国と地獄についてはその存在するところに関して我々は確実な知識を持っているわけではない。

68　第32章　アッ・サジダ章17節

預言者ムハンマドの仲裁（シャファーア）

ここでの仲裁（シャファーア）とは、罪を負う信者が地獄に落ちて罰を受けることなく許されて天国に行くことができるよう、罪のないものは更に高い段階に到達することができるよう、預言者たちやアッラーに愛されるしもべたちがアッラーに乞い願い、アッラーもそれを認めることを言う。

ここで重要なのはアッラーの御許しである。アッラーの御許しがなければ誰も仲裁などできない。クルアーンではこの件の重要性に鑑みて、複数の章でそれについて言及されている。

アッラーは次のように述べられる。

「かれの許しなくして、誰がかれの御許しで取りなすことができようか。」[69]

「彼が御許しになられた者の外、御前での取り成しは無益である。」[70]

これらの章句では仲裁を否定はしていない。しかし、アッラーが御許しを与えることなく行われる仲裁は効果がないことを示している。アッラーの御許しがあってこそ、この取り成しが行われるのである。

預言者ムハンマドはその日、信心を持って死んだ全ての人々のために仲裁をなされる。ある、ハディースで、預言者ムハンマドは次のように述べている。

「預言者にはそれぞれ、一つドゥアーがある。私はドゥアーを、ウンマの為にアーヒラにとっておいた。インシャラー、私のこの執り成しは、アッラーに対して決して何も同等に認めずに亡くなった人々に届くであろう。」[71]

69　第2章　雌牛章255節

70　第34章　サバア章23節

71　ブハーリー、ダアワート、1；ムスリム、イーマーン、86

「審判の日、私は仲裁を行うだろう。『主よ、心に唐辛子の粒ほどでも信仰がある者であれば、天国にお送りください。』とドゥアーする。彼らは天国に入る。それから私は、『唐辛子の粒より小さくても信仰を持っている者を、天国にお入れください。』と願う。」[72]

運命（カザー・カダル）を信じること

信仰の条件のもう一つは運命（カザー・カダル）を信じることである。

カダル：アッラーがいつでも、起こるであろうことを、それがいつ、どこでどのように起こるのかに至るまでご存知であられる事を指す。

カザー：アッラーが定められた事は、その時が来ると定められた形で実現することを指す。

言い換えると、カダルはアッラーの法や規範であり、カザーとは物事がその法に従って起こることを言うのである。

全てを定められ、創造されるのはアッラーだ。私たちはそのように信じる。なぜならアッラー以外に創造者はいないからである。アッラーは起こったこと、これから起こること全てをご存知であられる。時が来ると全てがアッラーが定められた通りに実現する。それを外れるものは一切ない。

クルアーンではこの件に関して次のように記されている。

「地上において起こる災危も、またあなた方の身の上に下るものも、一つとしてわれがそれを授ける前に、書冊の中に記されていないものはない。それはアッラーにおいては、容易な業である。」[73]

「言ってやるがいい。『アッラーが、わたしたちに定められる（運命の）外には、何もわたしたちにふりかからない。彼は、わたしたちの守護者であられる。信者たちはアッラーを信頼しなければならない。』」[74]

カザーやカダルといって思い浮かぶものはアッラーの英知やご意志、存在させるお方という風格であるべきである。つまりアッラーは、起こるであろうことを前からご存知であられ、その時が来ればその存在を望まれ、そしてそれを創造されるのだ。

全てはアッラーが望まれることによって、そしてその創造によって起こる。疑いの余地のないことだ。ただし、次のような疑問が思い浮かぶこともあるかもしれない。「全てアッラーが定められたように実現するのであれば、私たちがアッラーの命令に従わなかったり罪を犯したりしても私たちには責任はないはずでは？私たちはアッラーが定められたからこそそれを行ったり、行わなかったりするのでは。」といったような問いである。

アッラーは人間を創造され、人々に知性と意志、そして力を与えられた。人はその知性と意志によって善を選び、悪から身を守らなければならない。そうでなければ、人が知性と意志を持った存在であるということの意味がなくなってしまう。だから人は自らの知性と意志を使わなければならないのだ。人が、役に立つものを選び有害なものを避ける能力を「イラーダイ・ジュズイー」と呼ぶ。この意志と望みをどちらに使うか、どちらを選択するか、どちらであれアッラーはそれをわれわれの望みにふさわしい形で創造されるのである。

72　ブハーリー、タウヒード、36

73　第57章　鉄章22節

74　第9章　悔悟章51節

私たちのこの希望がアッラーのご命令にふさわしいものであればそこで善行を行ったことになり、ご命令に反するものであればその責任を負うことになる。例えば、(アッラーがお守りくださいますように)人を殺してしまったとしよう。アッラーが禁じられていることをしてしまったわけだ。ここで「どうすればよかったというのか、アッラーはこのように定められていたのだ。アッラーがそのように定められていなければ私はこんなことはしなかったのだ。」と、自らを弁護することはできない。なぜなら私たちは、自分達が行ったことを、行う前であれ行った後であれ運命のせいにすることはできない。私たちは意志をその方向で用いて、アッラーの定めがその形で現れるような原因を創ったのであり、その責任を負うのだ。

次の例は更に分かりやすくこのことを説明している。

ある天文学者が、自らの計算を元に、日食が起こることを証明し、報告したとしよう、その時がくると日食は起こる。この場合、日食が起こったのは学者が報告したからだろうか。それとも日食が起こるからこそ、学者はその報告を行えたのだろうか。

言い換えるなら、学者の、日食が起こるという報告が、日食の起こる原因となったのだろうか？あるいは日食が起こるであろうという事実が、学者がこの報告をする原因となったのだろうか？

考えるまでもなく、日食が起こるという事実が、学者の報告の原因となったのだ。学者が報告した為に日食が起こったのではない。

私たちが行うこと、あるいは私たちの身に起こることをアッラーが前もって知っておられるということは、このようなことを意味するのだ。私たちが自らの意志で、自らの選択で行う物事を、アッラーはその無限の英知で前もって知っておられ、それを定められるのである。アッラーがご存知であられ、そう定められたからそのことを行わなければならなくなった訳ではない。そもそも、自分達についてどのようなことを定められたか私たちは知らずにいる。何かを行う決心、あるいは何かを行わない決心をする際、私たちはなんの抑圧も受けず、自らの自由な意志で決定し、その決心に従って行動する。自らの意志で下した決定とそれに従った部分で、私たちは責任を負うのである。

運命に関するクルアーンの章句はこのようにとらえるべきだ。そうでなければ、自らの意志で殺人を犯し、盗みを働き、姦通を行った者、あるいはそれらのような禁じられた事を行った者は、その運命であったこういった振る舞いについて責任を問われないことになってしまい、それは過ちである。運命をこのようにとらえることは過ちなのだ。

オマルがカリフ時代、ダマスカスに向かって出発し、セルグという地に到着した際、軍の司令官が彼を迎え、ダマスカスでペストが発生していることを報告した。オマルはペストを避けるため、その病の発生した地に入らないことを決めた。そして戻ることを告げた。

それに対して司令官の一人アブー・ウバイダが彼に、

「カリフよ、こうやってペストの発生しているところに行くことを避けることによってアッラーの定められた運命から逃げようとしているのか。(アッラーがその病気で死ぬことを定められていたとしたら死ぬことになるであろうし、定められていなかったとしたらあなたは大丈夫であろう)」

と言った。オマルは、

「そんなことを言うのはあなたらしくない。アブー・ウバイダよ。」

と言い、それから付け加えて、

「アッラーの定められた運命から、またアッラーの定められた運命へと逃げるのだ。あなたのラクダたちが谷に降りていき、その片側は肥沃な土地でもう片側が砂漠であれば、あなたは肥沃な土地ににラクダを放す。その場合アッラーの定められた運命に従ってラクダを放牧することになっていたのではなかろうか？」と言い、運命をどのように理解すべきかを例を持って分かりやすく説明された。[75]

そう、私たちは運命についてこのように理解すべきなのだ。なぜなら我々は知性と意志を持っているからである。知性と意志を用いて行ったことに、責任を負う。これらが前もってアッラーによって知られ、定められていることは、私たちの意志には影響を与えない。なぜなら運命とはアッラーが「彼はこれ、これをするべきだ。しなければならない。」と述べたことではなく、「彼はこれを行うだろう。」と述べたことであるからだ。そうでなければ、自らの意志で行った、あるいは行わずにいられなくなった善行によって報奨を与えられること、悪行によって懲罰を与えられることの意味が成立しないのである。

75　ブハーリー、ハージュ、34；ムスリム、ハージュ、23

第三章　その他の事項

ルズク（糧）について

ルズク（糧）とは

ルズクとは、あらゆる生き物のために、飲食し、その効用を得るべくアッラーから与えられるものをいう。これはハラールでもあり得るし、ハラームでもありうる。正当な形でアッラーに求める者にハラールのルズクが、合法ではない形で求める者にはハラームのルズクが与えられる。ルズクをハラームの形で求める者にはその責任が問われる。

「ハラームであるものはルズクではない」という言葉は誤りである。その場合、生涯をハラームであるものばかりを食べて過ごした者は、アッラーから糧を与えられなかったことになってしまうからだ。クルアーンでも述べられている。

「地上にある全ての生き物の糧はただアッラーからのものである」[76]

ここでは全ての糧がアッラーから与えられたものであると教えられている。

人が責任を問われないためには、糧をハラールの形で求める必要がある。なぜならアッラーは、そのしもべがハラームの糧によって生を保つことをお喜びにならないからである。クルアーンでは次のように述べられている。

「人びとよ、地上にあるものの中で良い合法的なものを食べて、悪魔の歩みにしたがってはならない。」[77]

76　第11章　フード章16節
77　第2章　雌牛章168節

寿命

アッラーは、創造されたすべての生き物に、生きる長さを定められた。その期間、つまり生まれてから死を迎えるまでを寿命と呼ぶ。

どのような形であれ、すべての人に死は訪れ、それは一瞬たりとも遅れることはない。

すべての生き物を創造され、生を与えられているのがアッラーであられるように、死を与えられ、寿命を定められているのもまたアッラーであられる。アッラーの外には創造者も、また死を与える存在もいない。クルアーンでは次のように記されている。

「(かれは) 死と生を創られた方である。それは、あなたがたの中の誰の行いが優れているのかを試みられるためで」78

どのような形であれ死を迎えた者は、それぞれの寿命に従って死んだのである。寿命は、例え死に方が違っていたとしても、不変である。

ここで、次のような疑問を抱く人がいるかもしれない。誰かが殺されたとして、彼が寿命で死んだのであれば、その人を殺害した者はなぜその責任を問われなければならないのか。

そう、アッラーはこの殺人者が殺人を犯すことをご存知であられ、だからこそ、被害者の寿命をその日に定められたのである。被害者は、本来もっと長く生きるはずであったのに殺人犯がその寿命を短くしてしまったのではないのである。クルアーンでも次のように述べられている。

「アッラーの御許しがなくては、誰も死ぬことはできない。その定められた時期は、登録されている」79

78　第67章　大権章2節

79　第3章　イムラーン家章145節

殺人者の責任は、アッラーが禁じられている殺人を犯したことにある。アッラーは人を殺すことを禁じられ、それを大きな罪としておられる。

結論として、死者、殺された者、事故にあった者、彼らはすべて寿命によって死を迎えたのである。

寿命は延ばすことができるか

アッラーが定められている生の長さは、延ばしたり短かくしたりすることはできない。

いくつかのハディースは、サダカを行うことや善行を積み重ねることによって寿命を延ばすことができると伝えている。寿命を延ばすといっても、私たちが知っているような形での延ばし方ではない。アッラーは、人が行うべき宗教的実践や善行をご存知であられる。だからその善行によって評価される。あらかじめ定められた寿命が、のちに行われることになる善行によって延ばされるわけではないのである。

だから、善行によって寿命が延ばされることを示すハディースは、善行の奨励と解釈すべきであろう。

ヒダーヤとダラーラ

ヒダーヤとは真実の道を見つけること、ダラーラとは真実の道からそれることを意味する。

正確な意味では、真実の道を見つけることも、道をはずれることもアッラーのみが司っている。クルアーンでは次のように記されている。

「本当にアッラーは、御望みの者を迷わせ、また御望みの者を導かれる」80

80　第35章　創造者章8節

「アッラーが導かれる者は、（正しく）導かれた者である。だが迷うに任せられた者には、あなたは正しく導く保護者の一人も、見いだし得ないのである」[81]

アッラーが導かれるということは、しもべの心に真実の道の方向性を与えられるということである。迷わせることは、彼に迷いをしめされることを言う。

クルアーンにおける導きと迷いの意味とは、この通りであり、だからこそアッラーは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、

「本当にあなたは、自分の好む者（の凡て）を導くことはできない。だがアッラーは御心のままに導きくだされる」[82]と語られている。この意味で、導きと迷いにおいて預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）でさえできることは何もないのである。

ヒダーヤは正しい道を示すという意味を持っている。その場合、預言者を比喩的な意味で導き手ということは可能である。

クルアーンでは以下のように述べられている。

「あなたは、それによって（人びとを）正しい道に導くのである」[83]

「本当にこのクルアーンは、正しい（道への）導きであり」[84]

「主よ、かれらは多くの人びとを迷わせました。」[85]

正確な意味では、導きも迷いもアッラーが創造される。しかし、これらは比喩的表現として、他の者にも用いることができる。

81　第18章　洞窟章17節
82　第28章　物語章56節
83　第42章　相談章52節
84　第17章　夜の旅章9節
85　第14章　イブラーヒーム章36節

罪が許されること

アッラーは、多神教への崇拝とイスラームへの憎悪を除き、大きいか小さいかを問わず、どのような罪も、御望みによって許される。クルアーンでは次のように記されている。

「本当にアッラーは、（何ものをも）かれに配することを赦されない。それ以外のことに就いては、御心に適う者を赦される。アッラーに（何ものかを）配する者は、まさに大罪を犯すものである」[86]

この章句では、アッラーに何かを配する行為が、決して許されるものではないということを明確に述べている。

魂と生まれ変わり

人間は、肉体と魂から成り立っている。クルアーンでは次のように記されている。

「あなたの主が、天使たちに、われは泥から人間を創ろうとしている、と仰せられた時を思え。それでわれが、かれ（人間）を形作り、それに霊を吹き込んだならば、あなたがたは伏してかれらにサジダしなさい」[87]

人間を構成している一つの要素である肉体について、私たちは多くの知識を持っているが、もう一つの要素である魂について私たちは、あまり多くのことを知らない。魂の本質やあり方について、よく知らないのだ。なぜならアッラーは、この点について人間に、わずかな知識しかお与えになられなかったからである。クルアーンでは次のように述べられている。

「かれらは聖霊に就いてあなたに問うであろう。言ってやるがいい。聖霊は主の命令によ（って来）る。（人びとよ）あな

86　第4章　婦人章48節
87　第38章　サード章71、72節

たがたの授かった知識は微小に過ぎない」[88]

クルアーンのこの言葉は、人間にとって魂の本質を把握することは不可能であり、その理由として十分な知識が与えられていないことを示している。

魂は肉体とは別個の存在であり、肉体よりも先に存在する。

魂が肉体から離れると人の生は終わる。これが死である。肉体を離れた魂がどこに行くのかは、はっきりとは知られていない。

魂は肉体を離れた後、審判の日、甦った肉体に再び戻ってくる。だから、それより前に、この世に舞い戻り、他の肉体に宿ることはあり得ない。クルアーンには次のように述べられている。

「だが死が訪れると、かれらは言う。主よ、私を（生に）送り返して下さい。私が残して来たものに就いて善い行いをします。決してそうではない。それはかれの口上に過ぎない。甦りの日まで、かれらの後ろには戻れない障壁がある」[89]

この二つの節では、人は死後、復活の日まで再びこの世に戻ることができないと明確に記されている。

ここで、一つの迷信について言及することは、決して無駄なことではなかろう。それは、生まれ変わりと呼ばれているものである。死後、人の魂が再びこの世に立ち返り、他の肉体に宿ることだ。この思想は、イスラームの信仰の基本、特に死後の魂の復活と相容れないものである。一部の人びとは、あの世への信仰を壊すものではないという条件において、生まれ変わりはあり得るとしているが、それは不可能なことである。

死後、人の魂が、他の肉体に宿ることが可能であると主張する人たちが、その論拠として示しているクルアーンの節を、ここに紹介することは、決して不適切なことではないと思われる。それは以下のようなものである。

「あなたがたはどうしてアッラーを拒否できようか。かれこそは生命のないあなたがたに、生命を授けられた御方。それからあなた方を死なせ、さらに甦らせ、さらにまたかれの御許に帰らせられる御方」[90]

「かれらは申し上げよう。主よ、あなたは私たちを２度死なせ、２度甦らされました。今わたしたちは罪業を認めました。何とか脱出する道はないですか」[91]

この節では、二度死に、二度甦ったと書かれている。

これらの節で使われている死という言葉は、アラビア語では「生命」の反対という意味を持つ。生を持っていないこと、すなわち死、なのだ。つまり、死があればそこに生命はなく、生命があればそこに死はないということである。だからこの節にある、「生命のないあなたがた」という表現は、「まだこの世に生を得ていないあなたがた」というように解釈するべきであろう。解釈書（タフシィール）でも、このような解釈がなされている。

この世に生を受ける前の状況が、死、と表現されている。生きていたのに死んでしまったあなたたち、という意味ではない。

二番目の節における、二つの死のうちの一つは、人がこの世に生まれる前の状況を指している。そして誕生によって第一の生がはじまる。この世で生を送った後に訪れる死が、第二の死である。そして来世での復活が、第二の生となる。

この節で語られていることは、あなたたちは存在しなかった、

88　第17章　夜の旅章85節
89　第23章　信者たち章99、100節
90　第2章　雌牛章28節
91　第40章　ガーフィル章11節

アッラーがあなた方を存在させたのだ、それからあなた方を死なせ、さらにその後、甦らせられるだろう、ということだ。こういった意味を持つこの節には、生まれ変わりを思わせるようなことは書かれていない。

死後、この世に再び戻ってくることを認めることは、イスラームの信仰の基本である来世を否定することとなる。人はこの世で生きた肉体と共に再び甦るのだ。アッラーは、腐敗し消失してしまった骨などを集められ、人を魂と肉体と共に復活させられるのである。しかも、この世で用いた手や足が、自らに就いての証言者となるのだ。クルアーンは一つだけの存在である魂や肉体について言及しており、他の肉体や魂については言及していない。

またクルアーンでは、

「重荷を負う者は、他人の重荷を負うことは出来ない。」[92]としている。

この節は、罪が本人固有のものであること、行動がその本人のみの責任を問うものであるという基本を示している。もし、一つの魂が、何百もの肉体を移ってきたのであれば、その魂はどの肉体の行動の責任を問われることになるのであろうか。信仰しない者の魂が信仰する者の魂に宿り、人殺しの魂が潔白な人の体に移ったような場合、あの世ではこれらの肉体のうちどれと共に存在することになるのであろうか。

生まれ変わりはイスラームの信仰の基本と相容れない迷信ということが明白である。

死者の魂は、再びこの世に戻ってくることはない。あの世においては、この世で宿っていた肉体、あるいはそれに類する肉体に再び戻って甦るのだ。そして、その肉体と共に、あるいは報償を受け、あるいは懲罰を受けることになるのである。

92　第17章　夜の旅章15節

訳者から

1975年奈良県に生まれました。翌年から大阪で育ち、1993年大阪外国語大学国際文化学科トルコ語専攻科に入学しました。そこで知り合ったイスラーム圏出身の留学生からイスラームについて知識を得て、同年イスラームに入信しました。

1997年3月、トルコ語をさらに学ぶ為、イスタンブールに語学留学し、そこで知り合ったトルコ人男性と1998年4月に結婚しました。

1998年の末には共に帰国し、現在は日本生まれの長女と3人で東京在住です。トルコ語・日本語間の翻訳や、報道番組・教養番組などの映像翻訳・通訳を行っています。

イスラームについて興味を持つ方、基本的なことを学びたい方に、この本が役に立つことを願ってやみません。

2003年　東京

サット佐紀